

さびしさと重なりあうもの——小島ゆかり論

中村 恵

旅のはじめは旅のをはりに似てさびし足元に紺のトランクを置く

『六六魚』

旅が終わるころ、もう終わってしまふことをさびしく感じることはよくある。これに似ているという旅のはじめのさびしさとはなんだろう。おそらく、日常からの別れを指しているのではないか。慣れ親しんだ環境や人からいったん離れ、別の環境に身を置く旅というもの。こういう点にさびしさを感ずるところに、小島ゆかりのさびしさの奥深さがある。

思えば、第一歌集『水陽炎』の二首目にもこんな歌があった。(作られしものみな寂しき影もてり東京の空に日の沈む刻)。小島ゆかりにとつてさびしさというのは、いつでも、どこでも現れるものなのではないか。一般的にさびしげな場面ではなくともさびしさは潜んでいる。それが小島ゆかり作品の魅力のひとつであると感ずる。

本論をはじめの前に、「さびし」という語が使われている歌の数と表記の種類を確認しておきたい。第一歌集『水陽炎』から第十六歌集『はるかなる虹』までのうち、「さびし」が使われている歌は87首(うち長歌1首)、「寂し」が使われている歌は7首、「淋し」が使われている歌は2首であ

る。なお、「さみし」が使われている歌はなかった。

A群1. 季節とのかわり

風中に待つとき樹より淋しくて糞虫にでもなつてしまはう

『水陽炎』

冬牡丹見に来てさびし見るほどに花はひとりを深くして立つ

『ごく自然なる愛』

鳥獣園に來ればしんそこさびしきをまた来て春の帽子を失くす

『六六魚』

さびしさは言ふまでもなし素麵をトマトスープで食べてみたつて

『はるかなる虹』

まずは季節感のある歌から、どんな季節にどんなさびしさを感ずっているのか、見てみたい。一、二首目は秋から冬の例風の中で、また大きく咲く牡丹を見て、さびしさを感じている。三首目、春。何度も来てしまふ鳥獣園。人に管理された静かな獣たちを見る。四首目、夏。爽やかな味わい、生活のなかにもさびしさは色濃く存在する。春の「しんそこ」という表現、夏の「言ふまでもなし」「食べてみたつて」という表現は、秋や冬のものよりもずっと強い。

さびしさは一般的に、活気が失われて荒涼としている、孤

独だと感じられるなど、特に秋や冬の季節が過ぎ行くときによく感じられる感情である。一方で小島ゆかり作品では季節を問わず詠われている。全般的にさびしいとされる事柄を歌にするのではなく、自身の実感や感受性でもってさびしさを見つける様子がよくうかがえる。

A群2. 人といてさびしさを見つけてしまふ

寄せ鍋を食べつつ眼潤まをむころひとりひとり

のさびしき顔見ゆ 『希望』

ふりあふぐ一人一つの顔さびし大群集の花

火の夜に 『こく自然なる愛』

ハモニカをふあんと鳴らしてよその子がわ

が子のやうなさびしさを見す 『へブライ暦』

友人や家族と一緒にいるときのさびしさをよく見てみたい。一首目、数人で集まって湯気を囲む寄せ鍋。そんな楽しい状況でも、お腹がいっぱいになるころには話に花が咲き、眼が潤む。ひとりひとりの置かれた環境がそれぞれにさびしいものであると気づかされることもあるだろう。二首目、火花が上がるとその明るさに照らされてひとりひとりの表情が見える。火花のような明るい、力のあるものを見上げる人々の顔のなかにも、「一人一つの顔」があるとさびしさを見つける。「さびし」と言い切ることでの感情はなんだろうと読者に感じさせ、さびしさをくつきりさせている。三首目、「わが子のやうなさびしさ」とはどのようなさびしさか。よその子とわが子の間に横たわる越えられない川をわざわざ越えてくるような、親しみのあるさびしさと想像した。

B群1. 「われ」とさびしき

ここからは、特定の語と重ねあわせて表現されるさびしさに注目してみたい。

部屋中を片づけ終へてふかぶかと坐るさびしき
われが残りぬ 『獅子座流星群』

かなぶんのほひのこれるてのひらにしば
らく乗せぬさびしいわれを 『はるかなる虹』

一首目、すべてきれいに片づけた後、がらんとした部屋に自身だけが残る。二首目、二首後にある「かなぶんとなりて夜空にまぎれしかミヤンマーの若き死者のたましひ」などから、撃たれたミヤンマーの青年の魂を思う自身を、さびしい存在だと感じている。無力であることを悔しく思う。「われ」の文学である短歌においてあえて「われ」を言うことで、われという存在をとて非力で小さな個として感じて、どうしようもない様子が見えてくる。

B群2. 「太る」とさびしき

マイクにて語りはじむるわが声に驚けりこ
ゑもさびしく太る 『雪麻呂』

なきがらに近づかんとし中年の肉帯ぶるわ
がからださびしき 『やくら』

一首目、声が太くなったことへの驚き。「こゑも」ということは、声でないもの、肉体や精神なども太くなったと感じていたのだろう。二首目、叔父の死の歌に続く一首。叔父さんとは幼いころ遊んでもらった思い出があるのだろう、いまは年を経て「肉帯ぶる」体になった。これらのことが重なる

てさびしく思われる。自身の子どもを恋しく思い、いまをさびしく思う。変わっていくこととさびしさの重なりあいを感じた。

B群3. 「老い」とさびしさ

老眼鏡かけねば足の爪切れぬこんなさびし

さ思ひみざりき 『しく自然なる愛』

二本松峠紅葉 老年の凄きさびしさを牧水

知らず 『六六魚』

まず一首目、老いの現れをストレートに詠んだ歌。そして二首目も、とても強い感情が表現されている。たいへん美しい紅葉を前にして、「老年の凄きさびしさ」を知ってしまったのだろう。そのさびしさは年古るごとに増してゆき果てがなく、解決することもないということに思い至ったのではないか。

B群4. 「母」とさびしさ

祖母の背と母の背似るをさびしめるわれを

うしろから誰か見てをり 『希望』

訂正の赤えんぴつは母われのやうで さび

しくよく働けり 『憂春』

母といふこのうへもなきさびしさはどこに

でも咲くおほばこの花 『六六魚』

老いと思うとき、自らの先を老いてゆく人々の存在は大きい。一首目、母の背中が祖母の背中に似ていることに気づいたとき、自らの背中もまた子に見られている、老いる背中であることにも思い至る。この時の感情を小島ゆかりは「さびし」と詠んだ。二首目、思えば母という存在はさびしいも

ので、例えば子の誤りを正しては褒める、こまごまとした赤えんぴつのような存在である。三首目は、初孫が生まれたときの歌である。自身に限らず世の中の母という存在を、「このうへもなきさびしさ」と詠んでいる。オオバコは高地から平地まで道端などによく生える強い花だ。踏まれても朽ちず、どこにでもしぶとく咲く。そのような様に母のイメージを重ねて、さびしいものだと感じたのだろう。

また、自らが母になったように、娘も母になっていく。その姿を頼もしくもさびしく感じたのではないか。「老い」とさびしさと「母」とさびしさは強く引き合っているように思う。

B群5. 「人間」とさびしさ

あさあけを鳴きつつ鴉わたるとき海石のこ

とく人はさびしき 『泥と青葉』

手の中に螢を囲ひ人間であることこんなに

もさびしいよ 『獅子座流星群』

一首目、黒く大きな鴉でも飛んでいくことができる。鴉のようにすら飛ぶことができる人間を、重い生き物としてさびしく思う。二首目、昼のなかではわからなくても、螢は夜自ら光ることができる。人間の性愛・愛情の表現が難解なのは、螢のように光ることができるかもしれない。また、『月光公園』にあった「五十日われに宿りし螢子はけふ一滴の死者となりたり」を思い浮かべた。

ここまで見てきたように、人間であることとさびしさとは、非力であること、変わっていくこと、老いること、だれかの母であること、他の動物のように飛べないこと、光れない

ことなどを、すべて含むさびしさかもしれない。

C群・さまざまな表現とさびしさ

どのようなさびしさを、どのようなときに感じて表現しているのか、ひとつひとつ手に取ることで見えてくるものがある。ここで、比喩などの表現とともに表されたさびしさを鑑賞したい。

うつぶせば胸の下よりさびしさが虫のかた

ちをして現れぬ

『獅子座流星群』

春さればいかにかさびし飼主を横に立たせて糞をする犬

『く自然なる愛』

一羽のみ昏れのこりつつ白鳥は水上 駒のやうにさびしき

『六六魚』

一首目、虫のかたちというカフカ『変身』に登場するグレゴール・ザムザを思い浮かべた人も多いと思う。筆者は、「胸の下より」という柔らかい表現から、毒虫や甲虫のように固く尖った虫というよりも芋虫のような触覚を伴う虫を想像した。二首目、隣の歌に〈花しろき木蓮のした犬は来て糞をしてをりいたくまじめに〉とあるように、犬はとも真面目に糞をしている。このまっすくな存在を思うとき、さびしいものだと感じるのだろう。三首目、夕暮れを背景にする一羽の白鳥。水上駒という比喩がとも美しい。隣の歌〈白鳥は遠ざかるほど美しく死者へつながらる水の道あり〉と併せて、この駅から出る列車や船が、死者へつながらる水の道を走っているイメージを思い描いた。

さて、私たちが小島ゆかりの歌から学べる工夫があるのだら

うか。例えばA群やB群で見えてきたように、何かとさびしさを重ねあわせることで、説得力を感じさせる効果がある。またC群のように、比喩の力でさびしさにイメージを付加して、どのようなさびしさなのか読者に想像してもらおう方法がある。

A・B群の語彙やC群の比喩などに現れた表現が、小島ゆかりにとつてさびしさとはどのようなものに近いかを表していると言える。振り返ってみると、A群には糞虫、冬牡丹、鳥獣園、トマトスープ、寄せ鍋、花火、ハモニカのような語彙があり、B群にはわれ、太る、老い、母、人間のような語が、C群には、ここまで見てきただけで、虫のかたち、水上駒、糞をする犬のような表現があった。身近な傍らのものと共にあり、近い人に対しても感じるさびしさ。一様ではなく、大きさもまちまちだ。

何周目のさびしさならん春の雨ふればだけ
かを呼びに行きたし

『はるかなる虹』

小島ゆかりはずっとさびしさのなかを周っている。常にさびしいわけではなく、めぐってくるさびしさがあるのかもしれない。「だれか」とは、母か、夫か、娘か……何周目かによって、呼びに行けるだれかが異なるのではないか。今は亡き人の可能性もある。やさしい「春の雨」の到来を告げる相手がすぐ隣にはいないことを思った。

小島ゆかりにとつてさびしさとはどんな感情か。歌のなかで重なりあうものをヒントに、どんな感情だろうと想像してみたい。もとより人のさびしさとは、想像することしかできないのだから。